湘南藤沢メディアセンターの映画上映会

長坂（ながさか）　功（いさお）
（湘南藤沢メディアセンター）

1　はじめに

湘南藤沢メディアセンターでは主に16ミリフィルム映写機（図１）を使った映画上映会を2012年12月から不定期に行っている。この上映会は，ある時湘南藤沢キャンパス（以下，SFC）内で使われずに放置されていた映写機とSFC創設時を記録した映像リールがメディアセンターに持ち込まれ，マルチメディアサービス担当で修理したことが契機となっている。ちょうど16ミリフィルム映写機の扱いができる技術スタッフ[1)]がおり，そのスタッフがなんとか動くようになった映写機を活用する場として映画上映会を提案してくれたことがこの企画の始まりである。デジタルキャンパスとして知られるSFCとしては少々異色ではあるが，AVホールを会場としたこの映画上映会について紹介したい。

図１．16ミリフィルム映写機

2　図書館での映画上映会

図書館での映画上映会は当然ながら映画の著作権に配慮しながら，館内上映権を持っているタイトルで行う必要がある[2)]。大学図書館で行う上映会であるので営利目的ではないのだが，市販のディスクには上映権が付いていないことが多いため，所蔵資料の中でもパブリックドメインのものや上映権付きのディスクを利用することになる。16ミリフィルムでも同様であるが，湘南藤沢メディアセンターには16ミリフィルム資料の所蔵がない。そのため，所蔵のあるところから借り受けして上映することにした。具体的には日吉メディアセンター，資料利用の相互協力関係がある藤沢市民図書館の２つである。日吉メディアセンターには古いフランス映画を中心とした映像資料があり，藤沢市民図書館では16ミリフィルムのコレクションを使った上映会を続けているため，この２つの図書館所蔵からSFCでの上映に相応しいタイトルを選定することにした。

3　上映会の意義

現在のSFCで16ミリフィルムを使った「古典的な映画」の上映会を行う意義を述べておきたい。

SFCでは研究会をはじめとして映像制作が盛んに行われており，映像表現もデザインの一つとして認知されている。学生によるフィクション映画やドキュメンタリー作品も多数作られる。そのため，古典的な映画の上映はサイレント映画からはじまる映像表現の歴史や，モンタージュ論，フォトジェニックやシュルレアリスム，ダダイズムといった表現技法を知る機会になると考えた。また単に上映するだけでなく，教員の協力をもらって本上映前に映画の解説をしていただく上映会とした。今の学生に伝えるには時代背景を学んだうえで，当時のフィルム資料で上映することが役立つと思われるからである。

映画が最新の表現手段として注目されていた時代の映像的な手法には映像制作の原理原則となっているものも多いため，歴史あるものから学んで新しい発想や気づきを生むきっかけとなることも期待した。

4　企画と準備

会場は大きなスクリーンに高精細映像を投影できるプロジェクターを備え，音響設備の整ったAVホールを利用した。上映会の開催日時は解説していただく教員と調整し，事前に試写の機会を作ったりした。作品によっては映画そのものの解説をお願いすることが難しいため，解説内容は基本的に教員にお任せすることにした。また上映後にも学生・参

加者との歓談の時間をとっていただくようお願いした。あわせてレファレンス担当からメディアセンターの関連所蔵資料の紹介をしてもらうことにした。これは映画を観た後，参加者の興味・関心が高まれば，資料にあたることでより深い知識を得ることができるとの思いからである。

16ミリフィルム映写機で上映する場合は，フィルムリール巻取りのためのリワインダーや予備の映写機を用意することにも努めた。ランプ切れや動作不調という機械トラブルのリスクがあるためである。藤沢市民図書館からフィルムを借り受けた際は先方でも広報してもらい，希望があれば藤沢市民の方の入場もできるようにした。

広報活動としては告知ポスター（図２）や立て看板を作成・掲示し，メディアセンターWebサイト（SNS含む）も活用した。これは参加者アンケートからは館内掲示やツイッターなどのSNS広報が効果的であることがわかったためである。

図２．上映会告知ポスターの例

５　上映会の開催

上映会の開催記録は表１のとおりである。

実際に上映してみると，映写機のカタカタというリズミカルな動作音と16ミリフィルム映像の雰囲気が心地よく感じられ，作品がつくられた当時の上映情景に入っているかのようであった。毎回30名前後の参加者があり，総じて好意的な感想が多く，学生にとって身近な存在である教員の解説（図３）や上映後の懇談会は特に気に入ってもらえており，古典的な映画がかえって新鮮だったという嬉しい意見も多くあった。

映画には少なからず時代性が反映されているため，当時の状況を知識として得ておくことでより深く理解できるし，感性だけでなく学術的な視点を持っている教員の解説は，映画評論家のものとは異なった価値があるのだと思う。

図３．上映会での教員解説

表１．上映会開催記録

開催日	タイトル	解説教員	上映メディア
2012年 12月12日（水）	16ミリフィルム上映会 「新世紀を迎う　湘南藤沢キャンパス建設工事記録」	堀　茂樹 （総合政策学部教授）	16ミリ （SFC所蔵）
2013年 ５月22日（水）	シュルレアリスム特集 「アンダルシアの犬，アネミック・シネマ，幕間」	國枝孝弘 （総合政策学部教授）	16ミリ （日吉所蔵）
６月12日（水）	カンヌ国際映画祭特集 「午後の網目，ふくろうの河」	橋本順一 （商学部教授）	16ミリ （日吉所蔵）
７月12日（金）	SFCのドキュメンタリー上映会 「桃と小桃とこもも丸」	藤田修平 （環境情報学部准教授）	ブルーレイ （SFC生作品）
10月13日（水）	ネオレアリズモ特撰 「自転車泥棒」	堀　茂樹 （総合政策学部教授）	DVD （SFC所蔵）
11月27日（水）	16ミリフィルム上映会 「日本漫画映画発達史」	土屋大洋 （政策・メディア研究科教授）	16ミリ （藤沢市民図書館所蔵）
2014年 ５月21日（水）	映画上映会 「ジャズ・シンガー」	國枝孝弘 （総合政策学部教授）	DVD （SFC所蔵）

6　おわりに

映像技術は革新的な手法が幾度となく試され，映画を発展させてきた歴史がある。タイトル選定は悩ましいものの，持てるリソースを活用し映画というエンターテイメント素材を使えば，時間と場の共有から参加者間の交流を生み出し，大学という場を活かす取り組みができる。図書館員はつなぎ役として働ける。映画を大衆娯楽とする立場からは上映会の意味付けは後付けと指摘されるかもしれない。それでも湘南藤沢メディアセンターはSFCの映像制作を長きにわたりサポートしてきたのだから，映画上映会くらいは気楽にやろう，という思いもある。参加者はもちろん主催者側も楽しめる，そういう企画づくりを目指していきたい。

注

1）16ミリ映写機を扱うには「16ミリ映写機操作技術認定講習会」を受講し認定証を受ける必要がある。

2）著作権法38条第１項のほか，図書館における無料映画上映会については日本図書館協会と日本映像ソフト協会の合意事項（2001）についても留意する必要がある。